

<今回>288回目 2020年12月18日(金)14時~18時 602号室
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p267、金の武断 より

<前回>287回目(20-12-4)出席者 7名
資料(20-12-04-1)前回のまとめ(清水)
(20-12-04-2)船原古墳とその被葬者(高山)

A報告 下中村さんが旭区の聖マリアンナ病院に入院された(12・2)胃がんと診断。必ず治るからゆっくり療養してください。次回は14時から、途中休憩をはさみ1年を振り返りたい。

B資料 高山氏より2020年11月14日朝日新聞に国宝級玉虫の馬具が掲載された。船原古墳は古賀市、前方後円墳の外の1号土坑から馬具(3例め)が出土した。2013年発掘、7年間の調査で、発表された。古墳は盗掘されていた。愛用品が古墳の外の土坑から発見されるのは少ない。新羅製と類似。関連人物像を調査してくれた。宗像神社、宮地嶽神社が近所にあるが、安曇連一族の鞍橋君、磐井の乱の糟屋屯倉跡地に近い説もある。

C 読書 p262 渡海作戦 から

- 1)永楽5年(395年)は王の直接行動を示している。渡、破、為の動詞は文頭の王躬率を受けている。その行動の由来は百残、新羅旧是属民 由来朝貢而倭以辛卯年来 で、切る。辛卯年は永楽元年(391年)前国王末年に当る(好太王18歳)。22歳の時まで倭が百残にいたのを5年間辛抱した。その間、百済新羅が高句麗から見て属民のような態度をとらなくなった。
- 2)雌伏5年、南朝鮮領域の撃破作戦を敢行した。海上から側面を衝く作戦だった。天才的な奇襲作戦だった。これは魏の明帝が遼東半島の公孫淵の征伐を命じた時に司馬懿仲達がとった作戦に学んだものだった。
- 3)文脈の整理 敵の不当な行為に自らの行動を正当化するという文脈はこの碑全体の特徴をさす。まず碑麗が高句麗に非礼を止めないから討伐。永楽9年百残が誓いを違ひ倭と和通した、倭人横暴と新羅が訴えたから。
- 4)永楽14年、倭が帯方界に侵入してきた。永楽20年東扶余は鄒牟王以来の属民だが、朝貢せず。いずれも親征の根拠とされた。
- 5)永楽6年項の服、出(戦、威嚇)の動詞が賊を主語にしていることは明白で直後の怒、渡の動詞の主語は好太王だ。王威嚇怒の王は主語ではない。賊が王好太王に挑戦、威嚇してきた。そこで好太王は怒って阿利水を渡りの項に当たる。
- 6)年代順に勲績史のはずだったのを永楽5年と永楽元年(辛卯年)と永楽6年と錯乱した形で解釈していた。
- 7)「来」の背景 辛卯年(391年)中に国壤王が死んで18歳の好太王が即位しようとする間に倭が間隙を縫って侵入してきた。5年間は倭が優勢で百済新羅は高句麗に対して朝貢しなかった。それに耐えて好太王はやっとう意を整えて反撃した。それが渡海作戦で倭を破り、百済新羅を臣民にした。

次回日程 2021-1-8(金) 15時から18時 306 会議室
-1-25日(月) 15時から18時 1503号室
-2-5(金) 15時から18時 602会議室